

# Opinion

## 第5回 関東大震災の犠牲者



大災害の時代 五百旗頭真

中央防災会議の「報告書」(1993) 関東大震災報告書(第1稿)に表れる識者たちの関東大震災体験は、さすがに冷静な観察であり、貴重である。ただ、誰一人自宅が倒壊したとは書いていないことに示されるように、彼らは東京の中でも比較的地盤の安定した地域にいた。東京の東部、河川にはさまれた低地の惨状は、そんなものではなかった。

吉村昭「関東大震災」(文春文庫)には、2人の少年の回想が記されている。

一つは、浅草の映画館で西部劇を友人と見ていた14歳の時計工・政男の話である。「井土のせりふに目を傾けながら」カウボーイの兇事な二十拳銃に見入っていたところ、「不意に体が持ち上げられ」た。上層席の客が絶叫をあげながら、一階席に落下した。客は総立ちとなり、出口に殺到した。政男たちもまれながらなんとか館外に出た。大揺れが続く、館屋の軒先の柱にしがみついたが、その柱ごと建物が倒れそうであった。震動がやや衰えたので、路地から逃れ出たが、角の天ぶら屋が倒壊し、材木の下から眼珠が飛び出した男の顔が見えた。初めて見る死人の顔であった。路面が粘液のように揺れる中、調剤池の方へ逃げようとしたが、信じ難い情景が前方に見えた。(現在のスカイツリーのように)東京のシンボルであった12階建ての凌雲閣が傾き、上方部分が割れ落ちた。その音響と地震音が大地の揺れに加わり、政男の全身が痙攣を起した。

もう一つは、もっとも大きな被害を出した本所区(現在の墨田区)の小学生の話である。9月1日は、学期の始業式で、下

# 揺れと台風の複合災害

関東大震災の火災被害を伝える油絵「旋風」。徳永柳洲が被災直後の各所取材し、描きあげた(東京都復興記念館提供)



## 火炎旋風が下町を襲う

関東大震災による犠牲者は約14万人とかつて言われた。しかし近年の研究によって重複カウントが除かれ、約10万5000人と修正されている。そのうち約1万1000人が住家全壊による死である。この地盤による直接犠牲だけで、阪神・淡路大震災のほぼ2倍である。

別表に示した1万3600人という犠牲は、それだけで濃尾地震(死者7273人・1891年)、阪神・淡路大震災(6434人・1995年)を上回り、明治三陸津波(約2万2000人)と修正されている。そのうち約1万1000人が住家全壊による死である。この地盤による直接犠牲だけで、阪神・淡路大震災のほぼ2倍である。

爆発を起したケースだとはいえず、停車したあと通電する際に火を発生した例はかなり注目された。

関東大震災の時代と違つから、地盤に伴う火災などあまり心配することはない。そう考えらるるとすれば大きな誤りである。ただ、阪神・淡路大震災では、17の火事が燃え広がったが、幸い風は強く、犠牲者は死者の1割以内であった。死者数の9倍も以上の火災を、関東大震災が出した理由は何か。

強風である。その日9月1日、東京には10級から15級の風が吹いた。それは外出もはばかられるほどの強風ではない。その日語る人に、地震の起る前から大風であったと注記した例を知らない。午前中少し雨もあつたが曇りにはあがった。思いがけない突然の大揺れが来た。前日、台風が有明海から九州に上陸し、日本海に抜けた。当日、金沢付近に再上陸する頃には、勢力を弱めて温帯低気圧に転じていた。この日の午後、低気圧は北関東から東北を通過して太平洋へ抜けつづつた。秩父付近には副低気圧も生じた。結果として、副低気圧が広がるのと待てを合わせるように10級を超える風が吹き荒れ、しかも風向きがめまぐるしく変わった。南風から西風へ、そして北風にもなった。

家が早かったので友人宅へ遊びに行った。身近くなり、友人宅を出たところ、突然体がはね上げられ、道にしがみ込んだ。周囲の家の瓦がすべり落ち、壁が崩れ、大きく揺れていた眼前の家が土煙をあげて倒れ落ちた。10軒先のわが家に隣る路地が倒壊家屋によってふさがれた。仕方なく被服廠(旧陸軍の被服工場など)前の大通りへ這つた。この樹木をばなしたら死ぬと思った。肩をつかむ者がいた。父は金屋加三郎を言ひ、職人を10人ほど雇っていたが、その一人だった。彼からわが家もすでにつぶれたと知らされた。

関東大震災 火災を除く犠牲者数

府県	住家全壊	流失埋没	工場等の被害	計
神奈川県	5795	836	1006	7637
東京府	3546	6	314	3866
千葉県	1255	0	32	1287
静岡県	150	171	123	444
埼玉県	315	0	28	343
全府県	1万1086	1013	1505	1万3604

※中央防災会議「1923 関東大震災報告書」第1編より

東京府よりも神奈川県が多い。5800人近くで、東京府の35000人を上回る。さらに家屋倒壊に津波や山崩れ、さらに職場の工場倒壊による犠牲を加えると、神奈川県が76000人余、東京府が39000人近くとなる。地震災害そのものは、神奈川県がほぼ東京の2倍を占めているのである(別表参照)。

17年前の阪神・淡路の場合、もはやかまどの直火はなく、未明であったので炊事をしていた人もほとんどいなかった。それでも地盤と家屋倒壊は火を発生することを免れない。40力所から火が出て、17力所が大きな火事となった。火事の原因はいろいろである。ストーブなど電気器具が発火したケースや、家屋の揺れや倒壊により電線が引つ張られて火を発生したケースもある。意外に多かったのが、地盤により地下でガス管が切れ、もれたたガスが電気の火花で